

なぜ、ひらがなよりも漢字のほうがやさしいかというと、子どもの場合、漢字の形がそのままサッと頭の中に入ってしまうからです。あるがままをパッと受け入れてしまうのです。

われわれ大人は、まず全体を構成するものをこと細かに認識した上で、全体をつかみます。ところが幼児というのは、いきなり全体を大づかみにしてしまうのです。大人とは逆です。

教育学という学問は科学ではないために、実験というものをまったくしません。子どもにとっては、ひらがなよりも漢字のほうがやさしいということが、いろいろな実験によって証明されているにもかかわらず、幼児は学習能力がない、と頭から決めつけて教育が行われているのです。

明治以来、ずっとこう思い込んでしまっていましたから、多くの幼稚園では遊びが中心です。文字なんてとんでもないという考え方です。したがって、私が幼児に漢字を教えようとしたときは、文部省を始め幼児教育の専門家はこぞって猛反対をしました。

文部省が教科書をつくって、全国一斉に同じことを教育するようになった当時は、全部カタカナでした。一ページ目には「ハナ」というカタカ

ナが二つ並んでいました。花の絵があって「ハナ」、次のページをめくると「ハト」と書いてあって鳩の絵が描かれています。それから「マメ」。鳩が豆を食べているから、そこにマメと書いてある。その「マ」をそのまま使って「マス」。とにかく覚えにくいのです。

だいたい字というのは、発音です。どうしてこんな形をしているのか、なぜ「ハ」という音になるかは、何の意味もないのです。いろいろな音が世の中にありますが、その中から「ハ」という音を取り出して、「ハ」を表すのはこういう字だと教えられても幼児には結びつきません。われわれ大人は全部がわからないと、何となく全体が取っつきにくいと考えます。一冊の本でも、わからない言葉がいくつかあるような内容のものは、とても無理と放棄してしまうでしょう。ところが子どもというのは、わからないものがいくつかあっても、全体として何となくつかんでしまうのです。ちょうど蛇がタマゴをそのまま吞んでしまうみたいなものです。子どもは丸呑みしてしまうのです。大人はそういうことはまったく不得手です。

幼児の脳は、あるがままを取り入れます。ですから、漢字のようにまとまった図形のような形をしたものは記憶しやすいし、そのまま覚えられます。